

神楽を盛り上げる若い力

神楽に、若い力が集結。

神楽をする理由は、子ども神楽から引き続いて、人から紹介されて、神楽を見ていてどうしてもやりたくなくて、などさまざま。中山間地域での少子高齢化が叫ばれる中、神楽をするため、地元に残っている若者もたくさんいます。

若い力に支えられて存続する神楽。神楽に取り組む若い二人を紹介します。

子どもの頃、お父さんや近所のお兄さんが神楽をやっていたことがきっかけで、小学生のときに地元の東山子ども神楽団(北広島町)に入団した近藤彩さん。高校生になってからは大人の神楽団に入団し、その後、神楽を通じてご主人と出会い、ご主人が所属する高猿神楽団に入団しました。「舞い方が全く違うため、入団当初は一からの練習でした。昔は舞いたいばかりでしたが、今は、楽人や裏方として、みんなで神楽を作り上げたいという気持ちが大きくなっています」と神楽に対する考え方が少しずつ変わり、「みんなと作り上げる」神楽をやりたいと思うようになったと言います。

神楽をやると、多くの人と出会い、つながることができるかと近藤さんは言います。「知り合った人の思いを知って、実際にその人が



9/26 (土) 西浦八幡宮で舞われた奉納神楽。悪狐伝で神の役を勇壮に演じる近藤さん(写真右)。

舞われている姿を見ると、感動します。神楽にはドラマがあり、どんどん続いていくドラマを終わらせることができずしてました」。神楽の持つ魅力については、「神楽は、出演者や配役、舞人・楽人の調子によって、同じ演目でも毎回違うものができあがります。神楽は人の力で作られている、ということを感じられることも、神楽のおもしろさの一つだと思います」と語ります。

高猿神楽団は団長が指導する所作をきちんと覚えて、表現することを重要視しており、「団長が伝えてくれた高猿の舞を、次世代へ伝えたい」と思いを持っています。

神楽を続ける原動力は、神楽を見てくれた人からかけられる言葉と達成感だと近藤さんは言います。「神楽を見てくれた人から『元気が出た』と言ってもらえると、私も元気になるんです。また、家族のような高猿の団員たちと共に味わうことのできる達成感も、神楽を続ける原動力です」。

近藤さんの将来の夢は、「主人と子どもと一緒に神楽をやること」。高猿の神楽一家が私たちを神楽で楽しませてくれる日は、そう遠くないかもしれません。



真剣な表情で笛を吹く。多くの公演で近藤さんが笛を任されている。

どんどん続いていくドラマを閉じることができませんでした

高猿神楽団 団員
近藤 彩さん (32歳)



歳を重ねてから理想の舞に近づけるようになりました

横田神楽団 団員
平川 浩史さん (42歳)

20年以上横田神楽団で神楽を続けている平川浩史さん。しかし、中学生の頃、それまでやっていた神楽から離れていました。そんなとき、ある神楽大会で原田神楽団のエースの舞を見て心を打たれ、神楽魂に火が付いたと言います。「ここで神楽をやらなかつたら後悔する、という思いがものすごく強くなりました」。

平川さんは今までの舞い方について、「若手の頃は何も考えず思い切り舞っていました。が、若い頃のような舞ができなくなった30代前半から、口上や所作で勝負するようになりました。キレがないぶん、間の取り方などを研究して練習していました。今では、力を抜いて、要所所で力を入れるようにしています」と振り返ります。力を抜いた舞ができるようになった頃、「歳を重ねてから理想の舞に近づけるようになった」と言います。

競演大会で活躍を続けていた平川さんですが、「これ以上自分がやり続けると横田の若手が育たなくなる」という思いから、神楽をやり始めて20年が経った節目に競演大会からの引退を決意されました。



集中して手打ち鉦を叩く平川さん。楽人としても神楽団を支える。



9/19 (土) 横田八幡神社で舞われた奉納神楽。凛とした表情で紅葉狩の鬼女の大王を舞う。

平川さんは、自分が舞人として舞台に出るときに若手が裏方で支えてくれたことに感謝し、現在は、平川さんが裏方をすることも多くなったそうです。ただ、人手が足りず舞手として出演したり、競演大会の裏方をすると、自分が第一線で舞っていた頃の感触が蘇り、血が騒ぐことも度々あると言います。

平川さんは、今は神社で舞うことが一番楽しめる、と言います。練習も辛く、辞めたいと思ったこともありましたが、「今は楽しいばかりです」と笑顔で言います。

若手や子どもたちへの指導については、「遊びで教えているのではなく本気で教えているのだから、練習は本気です」がポリシーの平川さん。第一線から退いた後も横田神楽団の未来を担います。

神楽の魅力は、「一体感」と「地域に愛されていること」だと思います ～神楽ファンにインタビュー～



金子 愛さん
(東広島市在住)

両親の実家が島根県であったため、幼い時から祖父母の家に帰るたびに神楽を見てきました。年齢が上がるごとに内容が分かるようになり、いつしか舞の激しさや豪華絢爛な衣装に見とれ、お囃子を聞くだけでウズウズするようになりました。

神楽の魅力は、「一体感」と「地域に愛されていること」だと思います。観客が静まる中、始まったお囃子に観客は息を飲み、舞が白熱していくことで観客は同じように気持ちが高まります。こうすることで舞手と観客は一体になることができ、私はこの一体感にワクワクしています。また、神楽に携わっている人々や、その地域の人々の神楽に対する愛は深く、若い人からお年寄りまでみんなに愛されているからこそ、「これからも継承していかなければならない」という思いが生まれるのだと思います。